



# 国際貢献に係る同窓会活動について

波濤第二号でお知らせ

ているように、神奈川県学習センター支部の同窓会活動の主要なテーマの一つとして国際貢献を掲げています。これは、放送大学の同窓会は、卒業生の親睦を図るのとだけでなく生涯学習の推進、社会への貢献を大きな目的としているからです。発足当時から、役員会を主体に、社会に対してどのような部門で、どのような貢献を行うことができるのか熱心に討議してきました。同窓会の特徴としては小さな力を結集して大きなパワーにできるということと、長期間継続した活動が期待できる組織体を維持できることが挙げられます。このような背景を踏まえ、まず実行可能な具体的活動として「フォスター・プランによる援助」を国際貢献の一環として行うことに決定しました。

会員の皆さんに、このフォスター・プランによる援助を紹介するとともに、実行にあたっての協力と支援をいただくことをお願いします。

## 一、フォスター・プランの概要

★ フォスター・プランとは

フォスター・プランは、国連経済社会理事会によって公認・登録された、特定の宗教、政治に関係のない、民間で非営利の国際援助活動です。日本では、一九八四年に活動が開始され、一九八六年四月にフォスター・プラン協会が活動機関として、外務省の財団法人に認定を受け活動母体となっています。

現在、日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、オランダ、ベルギー、ドイツの八ヶ国が二十六の発展途上国に対して、主に子供たちの教育を対象として、その他関連する社会事業、健康管理、財政援助等フォスター・ペアレントとしての援助を行っています。

★ フォスター・ペアレントとは

フォスター・ペアレントとは、発展途上国に住む子供（フォスター・チャイルド）とその家族、地域に対して経済的、精神的援助を行う人を指します。現在、世界では約五十万人のフォスター・チャイルドがいますが日本からの援助を受けているのはこの内四万人（約八%）です。

★ 援助額は

フォスター・チャイルド一人に対して月々五千円の援助金が必要です。（同窓会ではフォスター・チャイルド二人の援助を目標としています。一人分のみならず、一人分の申し込みを行いました。）

## 二、同窓会活動としての基本的なスタンスについて

(一) フォスター・プラン

実行委員会の発足に、具体的な援助活動を企画・実行するため、当支部内にフォスター・プラン実行委員会が発足しました。実行委員会では、チャイルドの選定、援助資金の確保と運用、チャイルドとの文通・成長記録、援助関連の情報収集、日本国内での情報交換等が主な活動内容です。特に、会報においては、会計報告、フォスター・チャイルドからの手紙、絵などの送付資料・成長記録等について掲載し、会員に逐次報告することとします。

具体的には、実行委員会に加わってくださる方を募集していますので、実行委員会事務局の五十嵐または片山まで御連絡下さい。



### 連絡先

五十嵐 一成  
〒231 横浜市中区野毛町3丁目126  
鶴松ハイツ301号  
☎ 045-231-0285

片山 洋子  
〒248 鎌倉市長谷2丁目6-5  
☎ 0467-23-1511





藤田

茂光

(人間の探求 八十九年三月卒)

同窓会の皆様いかがお過ごしでしょうか。会より投稿の依頼がありましたので、大学で学んだ事などを綴ってみました。私は小さい時から「死」に対して特別な怖れをもつようになっていました。この恐怖心からついには不安神経症にかかってしまいました。この病気は大変苦しいもので、しかも確実な治療法はありません。私はこの病苦から逃れたい一心からあらゆることをやってみました。その中の一つが坐禅であります。そしてこの坐禅がやがて私の生き方を根底から変えてゆくことになりましたが、これとて最初から即効的なききめがあつた訳ではありません。これを継続してゆく中で何か少しずつ確実に変わっていることが感ずるような、遅々たるものであります。あまりの苦しきから絶望的になることが度々ありました。私は人間のさだめとしての死というよりも、「自己自身の死」を間近に感ずるところまでできてしまいました。死が人間にとって回避出来ない確実なものであるとしても私に与えられた私自身のこの権利とも言える自分の死が、一体どのような意味を持つているのか、それが問題となりました。そして私は、自分にとって充分納得出来る理由を見いだして、其の上で従容として死に執きたいと願うようになっていました。苦しきとそんな渴望にも似た願望の中から、昭

和六十年の春放送大学に入学し、哲学の中から答を見付けようと考えました。そんな六月のある日、私は素晴らしい人に出会つたのです。それは他の誰でもなくこの私自身であります。この見窄らしく、吐いて捨ててしまいたい程の自身に会うのです。この意識している現実の自己が、無意識の自己すなわち「本来の面目」に会うことが出来たのであります。私は入学の年に、藤田健治先生の「歴史の理論」を学ぶことになりました。先生にはテレビの上でしかお目にかかつておりません。しかし、その御容姿からは品格が溢れており、私の目には眩しい聖者のようにさえ映つておりました。「歴史の理論」は歴史哲学であります。先生のご講義は一貫して「哲学的人間学」でもありました。先生のご講義は古代・中世・近代の歴史観から始まりました。ニーチェ・マルクス・エンゲルスの「反ヘーゲルの歴史観」からデイルタイル等の「現象学派の歴史観」へと進んでまいります。哲学を初めて勉強する私にとつては大変むずかしい内容でありましたが、何故か「生の哲学」を聴くあたりから次週の講義が待たれるような、そんな姿勢になっていました。ハイデッカー・サルトル・キルケゴールを聴きヤスパースの実存を聴いている、まさにその時

であります。忘れもしない昭和六十年六月二十七日、私は私に会うのであります。ヤスパースの「歴史的规定性の限界状況」を聴いていた時、私は全身から力が抜けて空気のようになり、嬉しくてたまらないそんな体験を持つたのであります。それでは何がそんなに私を喜ばせ、原体験ともいえる程の驚きをさせたのでありますでしょうか。ヤスパースの「限界状況」とはどのようなことなのか。ヤスパースは言います。「我々が今、何故ここにいるかと問われてもそれはもう既に歴史的に決まつている。死も苦悩もそして罪責も全てがそうだ。それを何故と問われても合理的な回答は得られない。それは必然的偶然である」と。そして更に「これを運命と呼ぶならば、この限界状況の中で我々の生がどのようなものであると、諦めていやいや従うのではなく、精一杯悔いなく生きることである」と。このように説くのであります。この言葉が私の魂を根底からゆさぶり、迷妄に一撃をくらわし私を開眼させたのであります。実はこの言葉がこれ程にも私の胸間に直接的に入ってくるまでには随分と長い間の苦悩があつたからではないかと思つております。それは「私が何故ここに在るのか」という問いを公案を解くのと同じようにこのことを提せいでいたことと坐禅を修していたからではないかと思つております。「人間はこの呼吸を一生懸命に生きることである」と教えるのは実存の哲学も禅も全く同じであることに気



がつきました。(私はこれ等の事を纏めて専攻特論にしました。)

人間は自らの運命を素直に受けとめて日々これ好日として一生懸命生きなければならぬことは、とうの昔からわかり切っていた積もりが、何故か私は死ぬことばかり考え続けて来たことは、本当にわかっていなかったという恥ずかしい証でもありません。この点『哲学とは社会通念に満足することなく、物事をた

だ知っている」と信じていることではなく、本当に知ろうと努力することである」と。このように自分の病氣も、苦悩も、罪も、人間存在は非合理で偶然で自己の意志を超えたところから起因しているのだと本当に自覚出来た時、私は生まれ変わるこ

うに『我々は何処から来て何処へゆくのか』、つまり自己自身との出会いの為に勉強すること、これが本当の学問であり、また生涯学習ではないかと考えております。お互い生の涯が一年一年近づいて参ります。日々これ好日として、この不足なる自分自身をもつと愛しく優しくしてあげられるよう希念して止みません。

## 大学周辺探訪

### 第二回 大岡川の桜と鯉と

同窓会理事

須藤 威夫

京浜急行弘明寺駅から神奈川学習センターに通う道は楽しい。まず、「衣・食・遊」等様々な商店、百三十余軒が軒を連ねている。「見るも法楽」である。商店街の途中に赤い欄干の観音橋がある。この下を大岡川が流れている。この側道は大きな桜並木である。

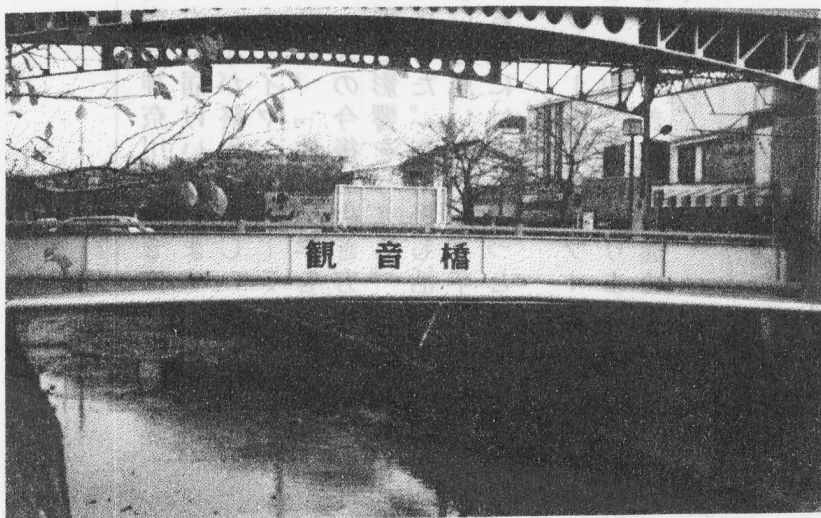
満開の桜、時に落花の行方を見る。川の中、真鯉、緋鯉が群れをなしている。水量の変化の激しい川で、背ビレを出して泳いでいる大鯉を見る朝もある。十年位前に地元で放流した鯉だそうである。夏は桜の木陰と鯉が涼気と呼ぶ。学園からの帰途、観音橋の所に人だかりがあった。のぞくと、中年の婦人が大きなビニール袋からパンを出している。「さあ今日はパンの耳だけではないよ。美味し

いところもあるよ」と、白パンをちぎって投げ鯉の大群に与えている。「大きな鯉もいるなあ」と弥次馬。「そう、二メートル位のもいるのよ」とパンやり婦人まさか・・しかし、恋思い(鯉思い)ということなのであろう。

秋、桜並木の落葉を踏んで学園に行く。後から来た婦人の声、「ああきれい」と紅葉黄葉を集めている。まさに「小さな秋」見つけたのである。

冬、大岡川の鯉も動きが鈍い。しかし、桜並木から川面に日がさすと鯉も生き生きと見える。

こうして、四季の変化を楽しみながら学園に通う。そして、学友と会う楽しみ、知ること、学ぶことの楽しさも加わるのである。





写真提供は  
松岡さんです。

後記 編集

「放送大学同窓会神奈川学習センター支部会報三号」をお届けいたします。激動の一九九一年が終え、新しい年を迎えました。ニューイヤー・パーティで浜口所長のお話により、「放送大学を卒業した私たち一人一人の今後の生き方が、放送大学のあり方に影響を与える。」というお話がありました。卒業後も活躍されている方も多いたと思います。卒業してホツとして私には、ちよつと耳の痛いお話でした。

神奈川学習センター支部ではフォスター・プランに取り組むことになりました。皆様のご協力をいただきながら進めていきたいと思っております。

